

## Wayang Beber

—— 中部ジャワ・Wonosari 地方のワヤン・ベベルを中心に ——

松 本 亮\*

### Wayang Beber: Focusing on the Wayang Beber of Wonosari, Central Java

Ryoh MATSUMOTO\*

Among all the various dramatic forms of *wayang*, including *wayang kulit*, the earliest to appear was *wayang beber*. *Wayang* refers to “the shadows that sway in men’s hearts,” while *beber* means “unrolling.” A *dalang* (narrator) gradually unrolls a long scroll bearing pictures of the narrative he is expounding. This is accompanied by a continuous performance of *gamelan* music, interspersed with the songs of *pesinden* (female singers). This form was created in the court of the Kediri kingdom (928–1222) in East Java and enjoyed a high reputation; but gradually it fell from favor and was replaced by *wayang kulit*, which emerged from around the fifteenth century. Today *wayang beber* is performed in only two places, Pacitan in East Java, and Wonosari in Central Java. In this paper, I shall present a full picture of *wayang beber*, focusing on the full translation of the *dalang*’s narrative (from the performance of Panji Asmorobangun), and note its correlations with other forms of *wayang* as well as touch upon the true essence of *wayang* itself.

#### はじめに

ワヤン・ベベルはワヤン・グリ（影絵芝居）をはじめ数あるワヤンのうち最も古く登場したワヤンの上演様式である。ワヤンは人間のところにゆれる影，ベベルは繰りのべるの意で，横長の紙に描かれた絵巻をくり広げながら，ダラン（語り手）がその絵物語を説き明かしていく。ガムラン楽曲の伴奏がたえずつづき，プシンデン（女性歌手）の歌声がまじる。

諸学者によれば，ワヤン・ベベル・プルウォは12世紀ごろ紙に墨一色で描かれて登場し，14世紀ごろ彩色，ワヤン・ベベル・ゲドクが16世紀ごろ作られたとされる。プルウォはラーマヤナとマハーバーラタの物語を素材とするもの，またゲドクはジャワで生れた物語パンジ，ダマルランなどから材を採ったものである。しかし今日ワヤン・ベベルとして知られるものはほとんどパンジ物語に由来し，上演されているのはわずかに，東部ジャワのパチタン県と中部ジャワのウォノサリ県にある二つだけである。

\* 4-30-10-707, Kamikitazawa, Setagaya-ku, Tokyo 156, Japan

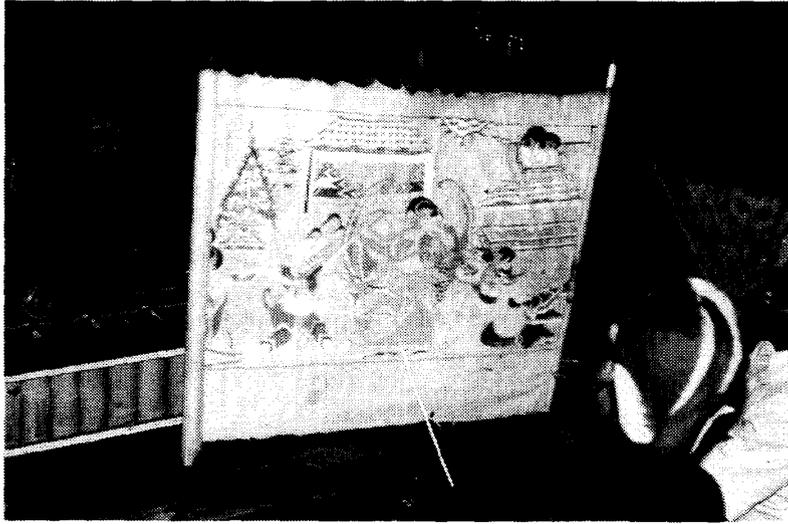


写真1 ウォノサリのワヤン・ベベル上演風景。冒頭〔1〕の部分。パチタンのワヤン・ベベル上演は、これとはちがってダランが絵巻の後方に回り、ガムラン奏者たちを背にして、絵巻の裏側で語る。(306 ページの写真参照)

### その盛衰の諸状況

古代インドの叙事詩ラーマヤナとマハーバーラタは10世紀末にいたって、東部ジャワ・クディリ王国の王ダルマヴァンシャ（在位991-1007年）が即位するや、その宮廷詩人たちによって盛んに翻案・抄訳されることになる。1045年には『アルジュノの饗宴』、1157年には『バラタユダの書』などの中世ジャワ文学を代表する長篇叙事詩が登場する。これらはロンタル椰子の葉に文字として、また絵物語として描かれた。こうした風潮のうちに、やがてロンタル椰子の葉よりはるかに大きな面積をもつ紙に描かれて、ワヤン・ベベルが誕生する。

国名こそ変わるが、その一族が継承したクディリ（928-1222年）、シゴサリ（1222-94年）、さらに版図を広めたモジョパイト王国（1294-1478年）はいずれもヒンドゥー教、仏教を奉じ、ワヤン・ベベルもまたヒンドゥー教の聖典であるマハーバーラタをその素材として花開いた。

一方13、4世紀以降、イスラム神秘主義がジャワ島北岸地域にじょじょに浸透する。その布教者たちワリ・ソゴ（9人の布教者たち）は王国の宮廷を中心にすでに人口に膾炙していたマハーバーラタを見て、この物語を換骨奪胎することによりイスラムの理念をそこに注入しようとつとめたのだ。さらにはその上演様式を改変しようとする。ここに絵巻としてのワヤン・ベベルはその登場人物が一人ひとり絵の中から採り出され、水牛の皮により細工されてクリル（白い布の幕）に投影し物語を展開するワヤン・クリ（影絵芝居）へと移行することになる。その代表的な演目が今日もお盛んに上演される「デウォ・ルチ」で、1450年ごろの初演とされ

る。デウォ・ルチとは、マハーバーラタの主役たちであるパンダワ5王子の次男ビモの魂の内なる神で、ビモは大海のただ中での瀕死のきわにこの神と出会い、人生いかに生き、いかに死ぬべきかの内奥の教訓を得るのである。こうした場面は本来のマハーバーラタには存在しない。

やがて時代はモジョパイト王国からイスラム教を奉ずるデマク王国（1478-1528年）に移り、しだいに登場人物たちの顔貌がはげしく変えられる。それまで人間の自然な顔に似せていたものが、ワリ・ソゴたちにより、偶像否定のイスラムの理念に則り、イスラム神秘主義であることから人形否定にまではいたらないながら、その顔は鼻先長く、人間の顔には違いなかったが解剖学的には異様な面貌として変質していったのである。ワヤン・ベベルもワヤン・クリもおなじ運命をたどり、今日にいたっている。今日のバリのワヤン・クリの姿はこの変質をとげる以前の形であり、その証明は13～15世紀にみられる東部ジャワのヒンドゥー教遺跡群、たとえばチャンディ・ジャゴやチャンディ・スロウォノその他の壁面浮彫にみるワヤン図像群に明らかである。イスラム教をきらったジャワの貴族たちがその荷物の底に当時のワヤン人形をしのばせ、バリ海峡を渡ったのだ。

イスラム神秘主義をはげしく布教するワリ・ソゴたちは多方面にわたり一大文化改革を敢行した。その一環として彼らはインド産でなく、ジャワそのものに存在したパンジ物語やダマルウラン物語にも目をつけ、これらをワヤン・ベベル・ゲドクとして登場させたのである。パンジ物語はクディリ王国時代、ダマルウラン物語はモジョパイト王国時代を背景とするが、今日その原典は未詳で、前者は1801年、後者は1748年のものが最も古く、原典はいずれも幾世紀かを遡りうるはずとされる。パンジ物語は主人公たちは同じだが、同工異曲のおびただしい展開をもつ。王女チョンドロ・キロノ（別名スカルタジ、別人だが同魂として描かれるアングレニ）を求めて放浪の旅にでたパンジ王子がついにはたがいを探しあて、結婚にこぎつける点だけは共通するが、放浪のようすや地域やその間の登場人物たちはさまざまである。主人公を共通とする同工異曲の物語の集積群であるといえる。ダマルウラン物語は、モジョパイト王国の未婚の女王クンチョノウングが反乱軍の首領メナジンゴに狙われ、この時馬屋番となっていたダマルウランが敵を粉砕し、女王と結婚するはなしである。

しかし時代の趣向は斬新な上演様式をみせるワヤン・クリへと急速度に傾いていくのである。これを受けてワヤン・ベベル・プルウォもワヤン・ベベル・ゲドクもしだいに宮廷から野に降り、上演はほそぼそと地方で命脈をたもつしかなくなって、記録によれば、マタラム王国2代の王セド・クラピア（在位1601-13年）即位のとき、ワヤン・ベベルが魔除けとして上演されたのを最後に、以来新しく作られることがなくなったと伝えられる。

### ウォノサリのワヤン・ベベル

ウォノサリは中部ジャワ・ヨグヤカルタ（通称ジョクジャ）の南方山地に在る。その絵巻物の持主は農業を営むサパル・クロモ・スントノ氏で、パジャン王国時代（1528-75年）の6代の祖グノ・クロモ氏が国王から拝領したものであるという。

その上演は、ワヤン・クリが結婚や割礼その他の慶事に催されるのとは違って、これは病氣平癒や雨乞いのためである。しかもこのワヤン・ベベルはサパル氏の住むグララン村から一歩でも出すと祟りがあるという。ただヨグヤカルタの王宮からのお召しのさいは別である。

サパル氏はダラン（語り手）ではない。ダランは同じ村に住むマルト・スカルディオ氏で、今日、上演できるのはこの人だけである。同氏はこの上演をみせていただいた1986年11月当時はウォノサリ県カランモジョ郡の地域文化保存担当官であった。絵巻は全4巻、1巻にそれぞれ4場面が描かれ、全部で16場面である。演目は『パンジ・アスモロバンゲン』（別称『ルムン・マムン・マンゲンウィジョヨ』）という。ワヤン・ベベル・ゲドクに属する。ポノロゴ紙に描かれ、1巻ほぼ左右5メートル、高さはほぼ50センチである。上下の端がぼろぼろになっている。太陽が照りつける昼下がりの上演だったが、サパル氏の家の屋内は薄闇の状態で、しかもランプはない。上演のさいには通常ランプはつけないとのことだった。



図1 エンゲル・エンゲルのガムラン譜



写真2 ウォノサリのワヤン・ベベルを保存するサパル家。この家の中で上演が行われた。1986年11月。



写真3 手前右がサパル氏。その後中央に座すのが、ダランのマルト・スカルディオ氏。ほかガムラン奏者たちとサパル家の家族。

伴奏のガムランはスレンドロ音階で、プシンデン（歌手）、クندان（太鼓）、グンデル、サロン、クンプル、ゴング（以上、青銅打楽器）、による構成である。プシンデンの歌も、ガムラン音楽（曲名はエングル・エングル）も、それぞれ一曲だけで、それをひたすら物憂げに繰り返すばかりである。ダランは朗々たる音声で、半ば歌うように唸るように、手に孔雀の羽の指示棒をもち、ときに絵の部分をもさぐる。1巻分を語り終えると、両側にいる助手の手をかりながら巻き戻しては、次の巻をとりだすのである。第1巻の絵巻は右から左へ、第2、3巻は左から右へ、最後の第4巻目は右から左へと描かれ、それにそって絵巻は繰り返しのべられる。

### ウォノサリのワヤン・ベベル語りの全訳

（注：文中〔 〕内の数字は全16場面の語りの部分を、一行あいた個処はガムランだけが鳴っていることを示す。）

**地語り** ホン・ミライン・マストゥ・プルノモ・シドゥム。おお、その昔、はじめには何もなかったが、まずは人間の王が、偉大なる神ヒヤン・カン・ムルブン・ジャガト・カロノによって造られた。この世は広くひろく限りがなく、やがて男の形、女の形が現われた。

〔1〕 さて、天界からもたらされた被造物はそのあたりを騒々しくさせる兵士たちだけではない。ここに展開されるワヤンの最初の場面はいずこか。これこそプロワトゥの花園である。

そのときラデン・パンジ・アスモロバングンはプロワトゥの花園に座し、いち早くこの花園から逃亡したいとの思いにゆれていたのである。彼の傍らには二人の側近、キ・ブレデとキ・ポロソッコが従い、やがて言葉がかけられるのである。

**パンジ** 叔父上、ブレデ叔父、ポロソッコ叔父よ。

**ブレデ** エエエ、何でございましょう。

**パンジ** さて、そなたたち二人、そなたらはわが希みによりここに呼ばれた。さ、そなたらはこのプロワトゥの花園より出立しようとする私に随行しなければならぬ。

**ブレデ** エエ……ラ・ダラ。どうしたのです。どうしてそのような気になられたのです。あなたは明日に、ライ・クスマニン・アユ・デウィ・スカクタジ・ガル・チョンドロキロノとの婚儀を迎えられる。なにゆえ、この花園から逃亡されようとするのか。このわしやそなたの父王、このクディリ国の王宮に久しく座を占めているわれらは、どうすればいいのでしょうか。

**パンジ** さればとはいえ、私はいまやわが愛の重みをはっきり計ることのできぬディアジュン・ガル・チョンドロキロノの言葉に怖れをかんじているゆえなのだ。

**ブレデ** ロ、ロ、そのわけは？

パンジ 叔父上，私はディアジュン・ガル・チョンドロキロノへのわが愛の大きさを披歴したのだが，そのときガルはわが愛の大きさの返答に対して，つまり私が小山ほども，たとえば限りなく広大な海ほどもディアジュン・ガル・チョンドロキロノへの愛を感じているといったのだが，それが理解されない。しかも残念ながら，ディアジュン・ガル・チョンドロキロノの私への愛の大きさはただ，クク・イルンほどのみという。（注：クク・イルン *kuku ireng* は黒い爪の意。指先ののびた爪の部分をさす。小山はいずれ崩れれば無に返りもしようが，黒い爪の部分は人間が活着している限りのびつづけ無くなることはないように，無限の愛を示す比喩をなしているのだが，パンジにはその意味の深さが理解できなかったのである。この比喩はマハーラタよりのワヤン・クリの演目『コロブンドノの死』において，アルジュノの息子アビマニュがデウィ・ウタリとの結婚にさいして，ウタリによっても使用され，著名である。）

ブレデ ウェ・ラ・ダラ，ハハハ……ハハハ……アヨ。なるほどそのような言葉でしたか。ハヨ，山ほどのものとクク・イルンほどのものか。で，どうされるつもりです？

パンジ 私はプロワトゥの花園を出たい。遠くを放浪し，足の向くまま気の向くままに，たえずうろつき歩いていたのだ。

ブレデ ウェーラ，父上や長老たちを心配さすことになる。

パンジ それはそうだが，あとで困ることになるよりはいい。よくよくに，ディアジュン・アングレニの愛について考えると，私の考えとの食い違いが大きい。あとできっと厄介なことになる。だからいま，私はこの花園を出したいのだ。

ブレデ 思いとどまることはなりませぬか。

パンジ ならぬ。

ブレデ ウェラ，されば，どうか私どもを伴に連れられますように。

〔2〕地語り いまや，ラデン・パンジ・アスモロバンゲンがガル・チョンドロキロノと結婚するはずが，その心を怖れ，花婿となることを御破算し，花園からただちに出発しようとするのが語られる。

パンジ・アスモロバンゲン出奔のニュースは稲妻の早さで，全国津々浦々にひろがった。パンジ・アスモロバンゲンの結婚が空しくなると，国中で叫ばれたのである。諸国の千の王たちはみなラデン・パンジ・アスモロバンゲンの逃亡を耳にした。

場面はかわり，ブミロコ国のことが語られよう。国王プラブ・ブチクスモロはその師ルシ・プヤンアキンをさし招く。この人物はブミロコ国の王宮前広場いっぱいひしめく兵たちを率いる大臣パティ・ガジャブントに随行されている。かくてプラブ・ブチクスモロは語るのである。

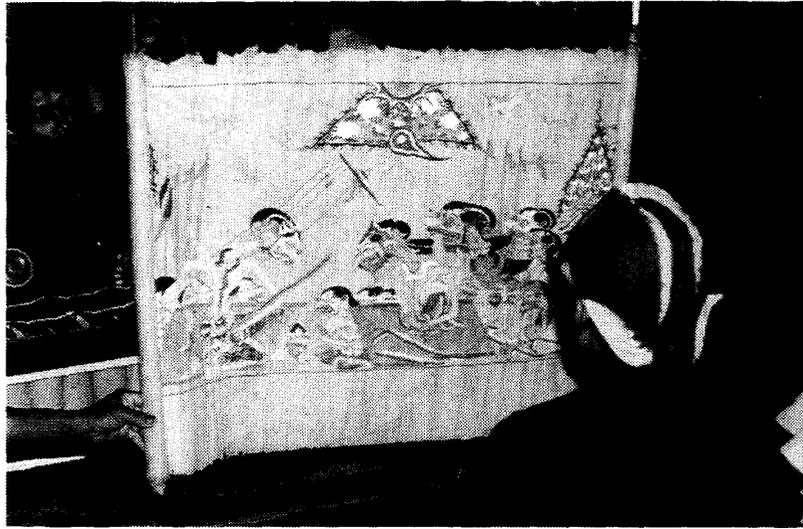


写真4 ウォノサリのワヤン・ベベル〔2〕の部分。

**ブチクスモロ** ウェ……ジャガト・デウォ・バトロ。伯父上，伯父上，わが師なる伯父上，ルシ・プヤンアキンよ。

**プヤンアキン** エエ……何でしょう。王はこのわしを召喚されましたが。

**ブチクスモロ** そなたもだ，パティ・ガジャブントよ。

**ガジャブント** はい，何でございましょう。いかなる目的でこの私，パティ・ガジャブントを召されましたか。いま私はこの国の指導者たち，将軍や理事官たちの多くをここに随行せしめました。どうかご命令を言い渡されますよう，王よ。

**ブチクスモロ** ヨ，ヨ……伯父よ，さ，さ，わしは遠くの伯父上をさし招いた。さ，近くへ，もっと近くへ。ラデン・パンジ・アスモロバングンとクディリの王女ガル・チョンドロキロノの結婚が失敗に帰したとの最新のニュースだ。ロ，このわしは王であってはまだ結婚しておらぬ。よくよくに考え，母上とも相談したが，わしはパンジ・アスモロバングンの未亡人にプロポーズしたい。未亡人でもかまわぬ。何でもない。それどころか，ウィドワティの化身の女たるガル・チョンドロキロノを手に入れたとあれば，わが王宮の評判は永遠につづき，わしの貫禄を大ならしめ，世界に公正の絆きずなを導き入れえようものを。(注：ウィドワティはジャワ女性の原像ともされ，神格を帯びる。稲の女神でもあり，ワヤン・クリ諸演目に登場する主要な女性，例えば宇宙護持の神ウイスヌの妻デウィ・スリ，ラーマーヤナにおけるロモの妻シント，マハーバーラタにおけるアルジュノの妻スムボドロラにも入魂。絶世の美女であり，つねにアルンコ国の怪物の王ラウォノにより，幾世代をこえ嫁にと狙われる。しかしそのつど彼女はラウォノの欲望をはねつけるのである。)

**プヤンアキン** おお，ハハハ……さようのことならば，さほど厄介なこともあるまいよ。パティ・ガジャ!

ガジャブント は、何でございましょう。

プヤンアキン いまや、王の命令をうけた。わしはクディリへプロポーズにゆかねばならぬ。

ガジャブント さて、カンジェン・ルシ・プヤンアキンのお望みは、いかようで。

プヤンアキン そなたはあまたの精鋭を用意するのじゃ。しかも秘密にな。わしはクディリに入る。そなたは街を十重二十重に包囲するのだ。クディリの街に入るものがあってはならぬ。それは王宮の花にプロポーズするわしの仕事を妨げるのだ。入ろうとする者あれば引き戻されよ。出ようとする者は構いなし。丁重にプロポーズして、かなえられればよい。だめならクディリ包囲を締めつけ、兵をあふれさせ、戦いの雄叫びをあげるのだ。

ガジャブント されば、われらは師父ルシのお言葉に従うのみ。

プヤンアキン それでよい。さて、お暇を乞う。どうか念願とされるものが成功しますように。

ブチクスモロ よろしい。伯父上、私もお伴しよう。出立だ、伯父上。

〔3〕地語り グムルビュクと、ブミロコの兵たちの声がする。すべての者はさまざまな武器を用意し、装備はたがいにぶつかり、あふれて鳴動する。やがてクディリの王宮の境界に近づいたのである。

いまやブミロコの兵たちの歩みにかわり、クディリの瞑想の部屋でのありさまが語られる。国王プラブ・ブロウィジョヨが座し、神のみ前に祈りを捧げる。というのもその娘と不滅の美丈夫との婚姻に胸ふくらませ、ジウムブル国王プラブ・アミルフルと共通の父となる喜びを噛みしめていたからである。

どうやらその祈りがかなえられ、突如バトロ・ナロド（宇宙支配の神バトロ・グルの代行神）が瞑想の部屋に降下した。サン・プラブ・ルムブ・アンディニ（ブロウィジョヨの別名）は驚き、すばやくサン・プラブはサンヤン・バトロ・ナロドに向かって拝跪する。

ブロウィジョヨ おお神よ。バトロ・ナロド。バトロ・ナロドのご来訪に敬意を表します。

ナロド おお、お、コロド・コロド。その敬意は受けよう。そなたはわしに挨拶をした。

バトゥユト（ブロウィジョヨの従者） エエ……ナロドさん、ようこそご無事で。

ナロド エエ……イヨ、バントエットよ。何ひとつの不足もなくな。うまくやってるかね、そなたの且那のお守り役は？

バトゥユト エエ……イヨ、瞑想のうちにおいでになった。さ、早く、わがご主人にお言葉をかけられるよう。

ナロド エエ……イヨ、王よ。

ブロウィジョヨ はい、何でございましょう。

ナロド ヒヤン・ブクルン（神の別称）が大地に降下して、そなたに近づいた。というのもそなたの瞑想によりカヤンガン・ジュングリン・サロコ（至高神ブトロ・グルの天界）には騒動がおこり、ゴロゴロ（不穏の状況を意味する）となった。さればそなたの瞑想の目的は何なのか、早く言われよ。

ブラウィジョヨ おお、そうですか。いまや私はパンジ・アスモロバングンとわが娘デノ（ぼちゃぼちゃとかわいいの意）・スカクタジの結婚を待ち望んでいるのです。したがって、ナロドさん、どうか神々の慈悲により、このクディリ国に安全を与えられ、すべてが何の障りもなく、うまくいきますように。

ナロド エエ……エエ……ラダラ、イヨ、ゲル、イヨ。わしはそなたの望むところを聞き入れよう。しかしながら、残念だが、そなたは混乱しないよう、転倒しないようにな。というのもそなたがクディク（小娘の意）・スカクタジとパンジ・アスモロバングンの結婚にあてたその日は、まさに凶日に当たっておる。これはこれは、日がよくないのじゃ。

ブラウィジョヨ お、そうですか。

ナロド ハ、しかし、やがてはうまくいく。何でもありゃしない。しばらく待つのがいい。そうあらねばならぬ。そなたへのわしの言葉はこれだけじゃ。ではわしはスロロヨ（ブトロ・グルの天界の別称）へ戻るとしよう。

ブラウィジョヨ わが敬意を受けられますよう。どうか、この想いがカンジェン・ウルン・ルシ・ナロドに届きますよう。

ナロド イヨ、受けるとしよう。

地語り ルシ・ナロドはまばたきのうちにスロロヨに戻った。神の口にしたことは必ず成るのだ。バトロ・ナロドによって与えられた指示は高貴にして真実なるものだ。場面が変わり、いまやラギル・クニン（パンジの妹）が慌てて現われ、伯父にしがみつく。

ラギルクニン ああ、伯父さま、私は死ぬ、伯父さま。

ブラウィジョヨ どうした、どうしたのだ。ラギルクニン。なぜそなたは息せききって走り、わが前に倒れこんだのか。

ラギルクニン 私の生死をおまかせします。伯父上さま。

ブラウィジョヨ 何があったのだ。なぜそなたはさようのことを口走るのか。

ラギルクニン はい、伯父さま。兄パンジ・アスモロバングンが急に花園から姿を消され、園を守護していた兵士たちに騒動が起ったのです。武将たちは会議をもち、あちこちへ、みんな兄パンジ・アスモロバングンの足跡を追うことになったのです。

ブラウィジョヨ エエ……ラダラ。されば、サンヤン・バトロ・ナロドのお言葉どおりだ。気

にすることもない。兵たちは何を会議しておるのだ。ぼんやりしておってはならぬ。わしは命令する。王宮前広場へゆき、カカン・プロジョノトに言うのだ。息子たちみんな諸方に散らばり、そなたの兄パンジ・アスモロバングンの居場所を探てまいれ、と。

**地語り** 息子や兵たちは先を争ってとびだし、ラデン・パンジ・アスモロバングンの行くえを探しに行く。

〔4〕**地語り** 場面がかわって、クディリ国の王子たちが居並んでいる。四方から集ってきた者の指揮官となっているのは誰か。これこそラデン・プロジョユド、またラデン・トゥロンゴプトロといい、彼はいま、武装に身を固めたラデン・バグス・ウムンサンに伺候されている。

**プロジョユド** 弟よ、ご機嫌はいかがかな。

**ウムンサン** はい、兄上に敬意を捧げます。

**プロジョユド** パンジ・アスモロバングンの安寧を保つため、当番にあたっておる将兵たち、また兄弟たちは幾人かな。

**ウムンサン** 明日、結婚を終えられることになっている兄アスモロバングンと姉デウィ・スカルトタジのため、王宮の諸状況警護に集っている兵たち、その仲間たちの数は、数えきれませぬ。

**プロジョユド** みなの方、よくよくに注意を払われよ。悪しき障害があってはならぬ。

**ウムンサン** 手落ちなきよう、みな、武装を整えておりまする。

**地語り** このようにラデン・マス・プロジョユドとその弟がラデン・パンジとデウィ・スカルトタジの婚礼警護について話しているとき、突如グムロジョグとラギルクニンがやってきて、ラデン・パンジ・アスモロバングンが王宮から消えたと告げる。

**プロジョユド** よく見れば、これはディアジュン・ラギルクニンではないか。

**ラギルクニン** はい、お兄さま。

**プロジョユド** ロ、どうしたのだ。わが前に現われて、そのようにも嗚咽し、すすり泣きをつづけるとは。

**ラギルクニン** こうなのです、お兄さま。私は伯父王プロウィジョヨさまから命令されたのです。パンジが昨夜花園から消え、どこにいるか誰ひとり知らず、騒動がもちあがっていることを、みなさんにお知らせするようにと。

**プロジョユド** で、お父王のご命令は？

**ラギルクニン** あなたは兵たちのすべてを解散させ、兄パンジ・アスモロバングンがどこにいるか探されますようにと。

**プロジョユド** おお、ハ、イヨ、されば、さ、弟グヌンサリよ。駿馬キヤイ・メゴノンドを所持するはそなただ。キヤイ・メゴノンドに騎乗し、クディリ王宮の内外を巡回されるよう。  
**グヌンサリ** かしこまりました。兄上、ご命令を実行いたします。

**地語り** さてと、まこと美丈夫にして剛毅なるラデン・マス・グヌンサリがクディリ王宮の内外をへめぐるさまが語られる。兵たちはみな、その騎乗ぶりの立派さに驚いたのである。

**地語り** すべての兵たちが、ラデン・アスモロバングンの行くえを右往左往、探しまわるを余儀なくされたありさまが語られる。

[5] **地語り** このようにして、ラデン・マス・プロジョノトの率いる軍隊が、ブミロコからの、その兵の数、数えられぬブミロコからの軍隊と遭遇することが語られる。しかしながら強く賢明なる武将たちは、ブミロコよりのおびただしい軍隊と出会っても驚かない。

**ブミロコの兵たち** エエエ、仲間たち、仲間たちよ、そんなに押さないでくれ。怖るべき重代の武器を差した武将が道中に立ちふさがっている。王宮の重代の武器が怖ろしい炬火を放って、きらめいているのがみえる。エエエ、てめえは誰だ。エ、道の真ん中であえて大きくのさばっているてめえは何者だ。

**プロジョユド** イヨ、わしはクディリ国王宮の戦闘指揮官、プロジョノト（プロジョユドの別名）。そなたらの恥知らずはクディリにまでも聞こえておるぞ。

**兵たち** エエ、エエ、てめえがいずこの王宮にまでも音に聞こえたプロジョノトか。われらはブミロコ国王プラブ・プチクの戦闘指揮官なるボボ・グル・ルシ・プヤンアキンによって率いられた者たちだ。クディリに入りたい。それというのもスカルタジがパンジと結婚しないという明らかなニュースをえたからだ。恥をさらさぬ方がよい。われらが師ルシ・プヤンアキンが、その結婚をのぞむその弟子プラブ・プチクに代ってプロポーズをしにゆくのだ。

**プロジョユド** ウェ・ラダラ。さればなおのこと、クディリの王宮に入ることならぬ。このラデン・マス・プロジョユドを打ち砕くことができぬうちはな。

**兵たち** われらが行動の邪魔だてしようってんだな。

**プロジョユド** 無駄口たたいてはならぬ。その身は砕かれよう。

[6] **地語り** 一方、クディリ国の王宮には、ガル・チョンドロキロノにプロポーズする千の国の王たちがいた。かくて王宮前広場には人があふれる。ほどもなくクディリ国王は謁見所から出て、言葉を発したのである。

プロウィジョヨ おお、申し訳ないが、諸国よりの千の王たちよ。どうかしばらく辛抱されるよう。

一人の王 おお、かしこまりました。おお、クディリの王よ、娘さんは私に与えられるのがよい。この私こそ賢明にして財宝ゆたかなる唯一の王だ。

他の王 おお、王よ、私だけです。私こそ娘さんを永遠に妻として大切にす識見に富む王であります。

プロウィジョヨ 申し訳ないが、諸国の王たちよ。どうかまずは辛抱されるよう。いまここにみなさんに申しあげる。財産も地位もなく、たとえ乞食であろうが、誰であろうと、わが娘ニニ・ガル・チョンドロキロノは嫁にすることができる。但し、条件がある。

王たち それは何。王よ、その条件とは？

プロウィジョヨ されば、これがクディリの長老たち、息子たちの相談の結果なのです。つまり、諸国の王たちのうち、一騎討ちにおいて、わが息子ラデン・アヌンサ（グヌンサリの別名）を打ち負かし、打ち砕きえた方あれば、誰であろうと、これこそが娘ガル・チョンドロキロノを嫁にすることのできる方なのです。

王たち おお、王よ。これは諸国の王たちの戦場となって、クディリの王宮を崩壊せしめることにはなりませんか。

プロウィジョヨ そうなったとして、これは何ほどのことでもない。

王たち されば、王よ。そのご子息はいずこに。私がお相手つかまつる。

プロウィジョヨ すでに向こうに。さあ、闘技場に出られるよう。

〔7〕地語り かくて先を争い、諸国の王たちはクディリ国の闘技場に出る。そこでまずは諸国の王たちはたがいに勝利の呪文の戦いを展開し、たがいに超能力をみせあい、その力を披歴する。ついには組み打ちとなる。王たちはみんな敗れて、闘技場をあとにする。この戦いの英雄となった者はだれか。これこそブミロコ国のパティ・ガジャブントだったのである。というのも彼のもっていた勝利の呪文、その霊力の根源にあったのが怖るべきウエウエ・プティ（巨大な乳房を垂れた女の白い化け物）だったのである。それがつねにパティ・ガジャを守護し、諸国の王たちはこの怖るべきウエウエ・プティの姿を見るや、バタンと倒れ、力が失せる。ふらふらになり、バラバラになって倒れる。パティ・ガジャが大声をあげると大地は崩れ落ちんばかりである。王宮前広場で見物していたすべての民衆もパティ・ガジャの振舞いを見た。彼らだけではない。天界の神々もみな天から、天界の美女たちも首をのぞかせ、パティ・ガジャの奮戦をみる。ただ一人、パティ・ガジャは手を叩き、膝をたたいて、カラカラと笑う。

いまや、パティ・ガジャとグヌンサリの一騎討ちだが、たちまちにしてラデン・パンジ・グヌンサリは力を失い、態度は尋常でなく、水牛の子どものようによたよたしていることが語ら

れる。ここにおいて、これまで姿を見せることのなかったクディリ国王宮の守護者であり、あらゆる学問に精通した一人の高僧、彼にはその危険の度合いがどのようなか、すべてが見える。かくてすばやく高僧はラデン・パンジ・グヌンサリに近づき、このように声を発するのだった。

バンチャイル ワ、どうした、美丈夫よ。

グヌンサリ おお、どうしたことでしょう、バンチャイル師よ。クディリの王子たち、属領の王たちも、怖るべき呪文をもつパティ・ガジャブントに対抗しえませぬ。

バンチャイル ハハハ、美丈夫よ。あれはウェウエ・プティの呪文と名づけられる者の仕業だ。あれが毒を吹きかける。毒にあてられた者は倒れる。

グヌンサリ ああ、わが生死は師におまかせします。

バンチャイル エエ、かんたんなことよ。やがてそなたはパティ・ガジャブントの前で死んだふりをするのだ。そして悲鳴を挙げつづけるのだ。というのもウェウエ・プティは化け物だが女だ。そなたのような美男子をじっくり見たら、きっと気がおかしくなる。おかしくなったら、わしが奴をやっつける。やっつけるのはかんたんなこと。さ、すぐにパティ・ガジャに立ち向かうのだ。

グヌンサリ おお、イヨ、お言葉に従います。

バンチャイル さ、さ。

地語り ほどなくラデン・マス・パンジ・グヌンサリはパティ・ガジャブントと対決するが、その体はたちまちに大地に崩れおちる。彼は殺せ、殺せと叫びをあげつづけたのである。死な



写真5 ウォノサリのワヤン・ベベル〔7〕の部分。

せてくれと叫びつづける。ウェウェ・プティはその体に近づき、ぐるぐる回りながら、グヌンサリのすばらしい美貌に気付き、驚いたのだ。美しい武将をみて、なおも全身をなめるように見回し、心動かされ、憐れみをかんじたことが語られる。ウェウェ・プティは心奪われたのである。この一瞬、ウェウェ・プティは投げ縄を投げられ、バンチャイルによってからめとられる。罫にからまれ、その首は締めつけられ、だんだんに締めあげられ、ついにウェウェ・プティは倒れ、このときその首は切れる。

[8] **地語り** たちまちにウェウェ・プティの首が落ち、バンチャイルによって大地に押しつけられたことが語られる。これにより当然パティ・ガジャブントも力を失って倒れる。その力が失せ、かくてジュンゴロ国（パンジ・アスモロバングンの国）の王子たちやラデン・パンジ・グヌンサリによって攻撃される。ジュンゴロの王子たちが群がり、パティ・ガジャブントのからだは引き裂かれ、もぎとられ、西へ南へ投げられ、王宮前広場中はパティ・ガジャブントの血でいっぱいになる。肩もひきさかれ、あちこちへ捨てられ、あたりの凶兆のすべてが消え去った。

[9] **地語り** パティ・ガジャブントが死んで、なお空中にいる者は誰か。これこそその弟子の死に復讐しようとするルシ・プヤンアキンである。

**地語り** ルシ・プヤンアキンは戦場にすすみでる。戦場に死んだその弟子をみて大いなる怒りをかきたたせたのだ。超能力きわまりない僧なるプヤンアキンは瞑想に入る。これを見たバンチャイルによってすばやく、くりかえし挑戦されるが、その挑戦には動ずることもない。

ルシ・プヤンアキンは瞑想し、九孔を閉ざし、脚を組む。かくてプヤンアキンの願いは成り、その姿が消え、突如空中に飛び、リントン・クムクス（ハレー彗星のような星）となる。

[10] **地語り** これこそ大空を尾をひいて飛ぶリントン・クムクスである。リントン・クムクスの威力とは何かといえば、クディリ国に疫病をもたらす悪臭の毒をふりまくことである。死人の数は数しれず。クディリ国の星占師たちはみんなこれに対抗するべく力を尽くすが、ルシ・プヤンアキンの超能力にうちかつことができない。ルシ・プヤンアキンの超能力はこのようであった。

場面が変わって、さきにクディリ国を逃亡して身をひそめたラデン・パンジ・アスモロバングンが、いまルシ・キヤイ・マングンジョヨ、またの名キヤイ・ルムン・マングンジョヨと名を変えていたことが語られる。天界のかぐわしい香りが、この人がスミナン山にいることを示していた。だが彼はクディリ国の騒動については知らなかった。



写真6 ウォノサリのワヤン・ベベル [10] の部分。

瞑想のうちに、彼はクディリ国からの逃亡はうかつなことだったと、つまり婚約者ガル・チョンドロキロノの言葉はまこと彼自身への誠実な愛を内包するものだったと気付いたのである。ことわざにいう、どんなに大きな洪水に出会っても生きている限り、クク・イルン（指先ののびた爪の部分）は成長しつづけると。つまり山はときとして爆発し、大海は干上るのである。かくて突然ラデン・パンジ・キヤイ・ルムン・マンガングジョヨのころはなごみ、まさしく王女なるライ・ガル・チョンドロキロノを讃美したのである。

さまざまな想念を描いたあと、瞑想からさめ、この時その妹クヌマニン・アユ・デウィ・ラギルクニンがそこにやってきたと語られる。

マンガングジョヨ さてと、よくよく見るにわが前に伺候したものは女であるような。

ラギルクニン お兄さま。私はジュンゴロ国の娘、ラギルクニンです。

マンガングジョヨ ロ、ラギルクニンか。

ラギルクニン はい。

マンガングジョヨ 何の用だ。

ラギルクニン 私は助けを乞うため、み前に伺候したのです。邪まな高僧がいて、クディリの王になろうとしています。ルシ・プヤンアキンの魔術によりクディリは大騒動です。クディリに怖ろしい毒がばらまかれ、疫病が蔓延しているのです。

地語り かくてルシ・マンガングジョヨは状況を調査しようとする。クディリはあきらかに暗黒に覆われてみえる。すべては敵の策略によるものだ。瞑想しスミラン山から、大空に立っている敵をはっきり見ると、それはまさにリントン・クムクス、長く尾をひいて飛翔する星である。

キヤイ・ルムン・マングンジョヨはさらに深く瞑想し、たちまちに大空に駆けのぼり、巨大な星となる。その星の名はリントン・ジョコとよばれる。

**地語り** これこそリントン・ジョコ・クロボの姿である。夜の夜空で、より強く光り、より輝いてみえるのだ。かくてルシ・プヤンアキンの星は悪意をもつものゆえ、しだいにその力は弱まりをみせようとする。リントン・ジョコ・クロボはいよいよ光り輝く。リントン・クムクスの魔力がなおも毒を放てば、リントン・ジョコ・クロボの力は解毒剤をふりまき、毒を消していったのである。

リントン・クムクスの毒にあたったすべての者はリントン・ジョコ・クロボの力によって息を吹きかえす。じょじょに、じょじょにリントン・クムクスはリントン・ジョコ・クロボの力に当たって力を失っていく。そして突然夜の夜空から消え失せたのである。

[11] **地語り** クディリ国はもとの静けさをとりもどし、平和で安全な国になる。だが、ルシ・プヤンアキンの怒りはそれで収まるものではなかったことが語られる。ルシ・プヤンアキンは大地に降って挑戦したのである。

さあ、クディリ国の守護者となってあえて戦場に出る者はだれか。いまやルシ・プヤンアキンが呪文を唱え、王宮前広場にまき散らしている。たちまちに怖るべき巨火が燃えあがった。火はいよいよ大きくなる。ルシ・プヤンアキンはみずからの冠りものをもぎとり、火のただなかに投げれば、それが美しいゴレ人形（木偶人形）の姿となり、それは火の中で焼かれているデウィ・ガル・チョンドロキロノのようにみえる。

このすべてがキヤイ・ルムン・マングンジョヨによって見透される。ルシ・プヤンアキンの奸計が。

そのときキヤイ・マングンジョヨは壺をつかみ、火に向って投げる。すると火の中でラデン・パンジ・アスモロバングンがデウィ・ガル・スカクタジを抱いた形がみえてくる。だんだんにきらめく光がみえ、火がしだいに消えていく。

[12] **地語り** 火が消えるや、双方とももとの形に戻り、壺はルシ・プヤンアキンの冠りものとひとつになる。その超能力が敗れたのを悟り、ルシ・プヤンアキンの力は萎える。すごすごとクディリの王宮前広場をあとにするのである。

いまや物語りは変り、スメル山に苦行所を開く老いたる聖女グスティ・キリスチが部下のハピダランを伺候させ、ジュンガラとクディリ、またムワルマンの三国を光輝あらしめるよう話しあっている。三つの国の王たちはラデン・パンジ・アスモロバングンとデウィ・ガル・スカクタジの結婚により、より一体ならしめられるようとのことである。このときエヤン・キリスチはその王座より立ちあがり、ジュンガラ、そしてクディリへと向かおうとする。その歩みは

まことすばやく……。

〔13〕地語り 騒ぎが鎮まるやラデン・パンジ・グヌンサリは、クディリの王宮に救いの手をさしのべた高僧は真実だれだったのかを知ろうとすることが語られる。

かくてラデン・パンジ・グヌンサリはウムブル・ウムブル（幟の意）の競技会を催すのである。彼は公示する、幾重にも束ねられた籐とうの幟を裂くことのできた者は、武将であれ僧であれ、誰であろうと、デウィ・スカクタジを妻にすることができよう、と。

クディリの王宮は湧き立つ。武将たち、高官、兵、王子やその仲間たちは大いに驚き、ラデン・パンジ・グヌンサリの意図が何なのかを怪しむ。だが執り行われねばならぬ。

いましもラデン・パンジ・グヌンサリの願いに同意した一人の僧が現われる。それこそルシ・マンゲンジョヨであった。

クディリの王宮前広場じゅうが、ジュンガラ、クディリ、ムワルマン各国の将兵たちでいっぱいになり、束ねられた籐を二つに裂くコンクールを見ようとする。また大空では神々が、王宮前広場の一辺にそって立て並べられたあまたの籐の幟を裂こうとする一人の男の仕事を見ようとする。籐の幟が整えられ終るや、ラデン・グヌンサリは言葉を発するのである。みなさん、ようこそお出でになられたと。ほどなくラデン・パンジ・アスモロバンゲンがすすみでて、あまたの幟を二つに裂こうとする。幟にそってしつらえられた籐製の橋の上を片足で跳びすすむや、超能力の持主であり、世の一切の教えを修め終えた武将にして高僧であることから、ルシ・マンゲンジョヨはすべての籐をたちまちにして二つに裂きえて、橋のまん中に立っている。かくて見物人はみな驚き、大空に喝采がひびきわたるのである。

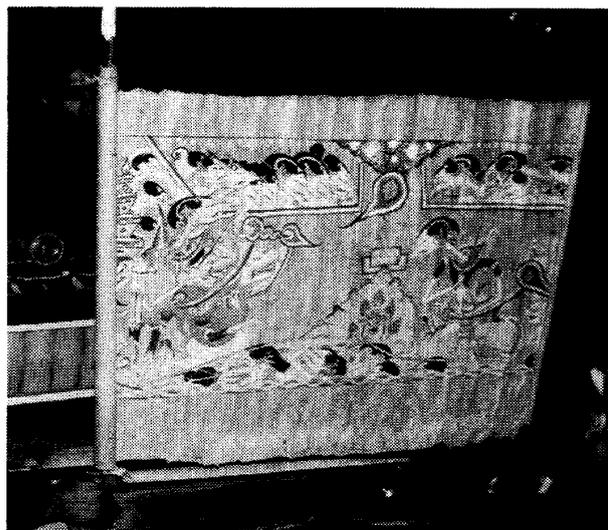


写真7 ウォノサリのワヤン・ベベル〔13〕の部分。

[14] 地語り デウィ・スカクタジは闘技に参加した者がラデン・パンジ・アスモロバンゲンであることを知り、父と母に告げる。さあ、エヤン・キリスチと手をつなぎ、王宮前広場にいたラデン・パンジ・アスモロバンゲンを迎えましょう、と。

[15, 16] 地語り 涙したたらせ、ラデン・パンジ・アスモロバンゲンはエヤン・キリスチと父母、そして長く会うことのなかったデウィ・ガル・チョンドロキロノに迎えらる。乳母たち、女官たち、みんなもラデン・パンジ・アスモロバンゲンの帰還を歓迎する。

かくてワヤン・ベベルの物語は終る。どうかこの物語が、生の完全性をえようと努める人のための指標となりえますよう。キヤイ・ルムン・マングンジョヨの行為はこのようであり、ここに私の語りの言葉も終る。

### ウォノサリのワヤン・ベベル付記

2時間近くを語り終えたダランはぼつりと呟いた。この語りは、先輩ダランから教えられたもので、ワヤン・ベベルは教えられなかった部分を自分勝手な脚色で語り加えることはできないのだと。したがって、この家にある他の絵巻『ジョコ・タルブ』（天人の羽衣に似た伝説）は先輩から教えられる機会がなかったので、残念ながら語るることができないとのことであった。とすれば、ここでは言葉の細部における即興は可能としても、ワヤン・クリでのような思いきった即興性、構成の変化、当意即妙のイメージは許されない。

上演にさいしてランプは不要だとする点にかんしては、ワヤン・クリをはじめとするさまざまな様式のワヤンが本来見るものでなくダランの語りとガムラン伴奏を聴くだけで十分なのだとの理解がここでも十全に生きていることを思い知らされるのである。

物語の中で、星が歴然と主要人物になりかわる点については、龐大なワヤン・クリの演目の中でも辛うじてマハーバーラタの英雄ビモが聖なる星の象徴と語られることがあるくらいで、それが敵味方となって戦うなどと設定されることは、絶えて無い。星の登場に、インドやイスラムの占星術のワヤン・ベベルへの強い浸透が見られる。一般にはジャワの人びとは星への関心はほとんど示さないのである。

### パチタンのワヤン・ベベル

最後のモジョパイト国ブロウィジョヨ五世（在位 1468-78 年）の王女がある時えたいのしれぬ病いに伏した。この王女の病気を治したのが、ノロドルモとよばれる寡婦で、彼女はそのお礼に王から、子々孫々にわたって生活の糧をえられるようにと、ワヤン・ベベルを拝領したという。この女性の 13 代の孫が、現在この絵巻物を所有するサルネン氏で、彼自身ダランだが、

いまは令息が代ってダランをつとめているという。パチタンは東部ジャワの南西端に位置する。村の名はグドムボルである。

このワヤン・ベベルの演目は『パンジ・ジョコ・クムバンクニン』である。さまざまな記録によればパンジ物語を描いたワヤン・ベベル・ゲドクは16世紀に登場するとあることから、これが最後のモジョパイト国王からの拝領という説には疑問符がつくが、それはともかく、さきに紹介したウォノサリのものよりは時代が古いことだけは確かなようだ。

これまでのワヤン・ベベル研究はほとんどこのパチタンのものに集中している。このワヤン・ベベルは6巻から成り、1巻に4場面、つごう24場面が描かれ、1巻の長さはほぼ4メートル、高さは40センチ、ガムラン伴奏はルバブ（擦弦楽器）、クンダン（太鼓）、クトゥ、クノン、ゴング（以上青銅打楽器）で構成される。曲はウォノサリのもと同じく1曲だけで、その変奏をくりかえすだけという。上演目的は病氣平癒祈願である。以下に、24場面に分けた物語のあらすじを示すことにしよう。

〔1〕 クディリ国のブロウィジョヨ王は王座にあって、大臣や将官たちと協議している。そこにはジョコ・クムバンクニン（別名、パンジ・アスモロバンゲン）もいる。問題は王女デウィ・スカクタジ（別名、チョンドロキロノ）が異国の王クロノの求婚を嫌い、いずこともしれず失綜してしまったのである。

〔2〕 スカクタジ探索を命じられたジョコ・クムバンクニンは二人の召使いを連れて出発。途中クロノ軍に遭遇するが、身を避ける。

〔3〕 スカクタジははるかに逃亡して、トゥムンゲンガン村の市場で物売りをしている。

〔4〕 ジョコ一行は鉦や大鼓を鳴らし踊る旅芸人よろしく村々を回り、やがてトゥムンゲンガ



写真8 パチタンのワヤン・ベベル〔4〕の部分。  
(1983年パチタンのワヤン・ベベル・カレンダーより)

ン村の市場に入る。その大騒ぎに、スカルタジはワリングンの大樹のかげにかくれる。これを知ったジョコだが、彼はそのまま養父キ・ドゥマン・クニンの村へ向かう。

〔5〕 キ・ドゥマンはジョコからこれまでのすべてをきき、慎重にとさとする。

〔6〕 老いたる女魔術師ムボ・ミンドコがクロノからの使者としてその妹のテガロンの訪問を受け、クロノのスカルタジへの求婚を知る。ミンドコ怒り、両者の戦いとなる。

〔7〕 テガロン敗れ、クロノへの報告に戻る。

〔8〕 スカルタジの兄ゴンドルポがジョコの家来タウンアルンから一部始終をきく。

〔9〕 ゴンドルポは父王にスカルタジ発見のいきさつを語る。クディリ国王はただちにクロノに嫁取りの闘技を告げる。ジョコに勝利した暁にはスカルタジを与えようと。

〔10〕 まずはクロノの部下クボロロダンとジョコの部下タウンアルンの戦いだ。

〔11〕 この状況報告を受けたジョコ・クムバンクニンは急拠クディリ国へかけつける。

〔12〕 クディリの王宮前広場ではタウンアルンがクボロロダンに圧倒され、傷つく。

〔13〕 タウンアルンはその弟分ノロドゥルモの看護を受けている。

〔14〕 やがてジョコとクボロロダンの戦い。

〔15〕 ジョコは勝利するや休息のため養父のもとへ去るが、さらにクロノと戦うべく、呼び戻される。

〔16〕 さきの戦いで傷ついたタウンアルンが静養中、ジョコの使いにより呼び戻される。

〔17〕 一方、クロノ王は決戦に臨み、まず瞑想によってスカルタジの兄ゴンドルポの姿に変身し、クディリ王宮の女の館に忍びこみ、スカルタジを拉致しようとする。彼自身の妹により卑劣だと邪魔されるが振りきり、その姿のまま王宮に侵入する。

〔18〕 にせのゴンドルポがスカルタジに近づく。彼女はそれが贗者であり、クロノの変身だと気付くが、しだいに追いつめられる。そこへ本物のゴンドルポが現われ、戦いとなり、贗者は敗れ、逃走する。

〔19〕 両軍のはげしい戦いがつづく。やがてクロノはタウンアルンとの一騎討ちに斃れる。

〔20〕 クディリ軍はクロノの拠っていた広大な幕舎から財産や女どもを奪いとる。

〔21〕 クロノ王の女たちはすべてクディリの王宮へ連れられ、ゴンドルポに預けられる。

〔22〕 王座にあるクディリ国王ブロウィジョヨはゴンドルポからあまたの戦利品を受け、ここにジョコとスカルタジの婚儀を宣告する。

〔23〕 花嫁花婿のあでやかな装飾を身につけ終えた二人が、プンドポ奥の正面に座す。

〔24〕 ジョコ・クムバンクニン（パンジ）とスカルタジの盛大な婚礼の儀が催される。



写真9 ワヤン・ベベル上演中のサルネン氏。半開きの絵巻は〔8〕の部分。パチタンで。  
(ルルン・プストコ, 1970年8月号より)

## おわりに

ワヤン・ベベルはすべてのワヤンの原点をなす上演様式であるといわれる。12世紀に登場し、一時は華やき、やがて野に下った。語りと伴奏音楽を本質とするワヤン千年の歴史のうちに、ワヤン・ベベルはひそやかに、はるかな昔、そして未来を見詰め、その本質を見失うことへの警告を秘めて清冽の地下水のきらめきを、今日なおゆらめかせつづけているのである。

## 謝 辞

本稿を仕上げるにあたって、チュ・ストヨ、M. ムスタム、大和田尚、加清明子諸氏のご協力をえた。厚くお礼申しあげる。最後に、この一文をワヤンの世界に並々ならぬ関心を示されたいまは亡き土屋健治氏に捧げる。

## 参 考 文 献

- Harsono Hadisoeseno. 1965. *Pendidikan dan Kebudayaan—Wayang dan Pendidikan*. Jakarta: P & K RI.
- Haryanto, S. 1988. *Pratiwinba Adhiluhung*. Jakarta: Djambatan.
- 松本 亮. 1985. 『悲しい魔女』東京: 筑摩書房.
- \_\_\_\_\_. 1994. 『ワヤンを楽しむ』東京: めこん.
- Poerbatjaraka R. M. Ng.; dan T. Hadidjaja. 1952. *Kepustakaan Djawa*. Jakarta: Djambatan.
- Sayid, R. M. 1980. *Sejarah Wayang Beber*. Solo: Reksa Pustaka.
- Sœtarno Dh.; dan TH. Sœwarno. 1979. *Wayang Beber, Ceritera Joko Kembang Kuning*. Solo: Yayasan Bina Budaya.
- Sri Handojo Kusumo. 1970. *Relung Pustaka—Kerumah Djoko Kembang Kuning*. Solo: Jajasan Paheman Radyapustaka.
- Sri Mulyono. 1975. *Wayang-Asalusul, Filsafat dan Masa Depan*. Jakarta: PT Gunung Agung.